

故郷

太宰治

青空文庫

昨年の夏、私は十年振り^ぶで故郷を見た。その時の事を、ことしの秋四十一枚の短篇にまとめ、「帰去来」という題を附けて、或る季刊冊子の編輯部^{へんしゅうぶ}に送った。その直後の事である。れいの、北さんと中畑さんとが、そろって三鷹の陋屋^{ろうおく}へ訪ねて来られた。そうして、故郷の母が重態だという事を言つて聞かせた。五、六年のうちには、このような知らせを必ず耳にするであろうと、内心、予期していた事であつたが、こんなに早く来るとは思わなかつた。昨年の夏、北さんに連れられてほとんど十年振りに故郷の生家を訪れ、その時、長兄は不在であつたが、次兄の英治さんや嫂^{あによめ}や甥^{おい}や姪^{めい}、また祖母、母、みんなに逢う事が出来て、当時六十九歳の母は、ひどく老衰していて、歩く足もとさえ危かしく見えなければ、決して病人ではなかつた。もう五、六年はたしかだ、いや十年、などと私は慾の深い夢を見ていた。その時の事は、「帰去来」という小説に、出来るだけ正確に書いて置いたつもりであるが、とにかく、その時はいろいろの都合で、故郷の生家に於^おける滞在時間は、ほんの三、四時間ほどのものであつたのである。その小説の末尾のほうにも私は、——もつともつと故郷を見たかつた。あれも、これも、見たいものがたくさん、たくさんあつたのである。けれども私は、故郷を、チラと盗み見ただけであつた。再び故郷の

山河を見ることの出来るのはいつであろうか。母に、もしもの事があつた時には、或いは、もういちど故郷を、こんどは、ゆつくり見ることが出来るかも知れないが、それもまた、つらい話だ、というような意味の事を書いて置いた筈であるが、その原稿を送った直後に、その「もういちど故郷を見る機会」がやって来るとは思い設けなかつた。

「こんども私が、責任を持ちます。」北さんは緊張している。「奥さんとお子さんを連れていらつしやい。」

昨年の夏には、北さんは、私ひとりを連れて行つて下さつたのである。こんどは私だけでなく、妻も園子（一年四箇月の女兒）もみんなを一緒に連れて行つて下さるといふのである。北さんと中畑さんの事は、あの「帰去来」という小説に、くわしく書いて置いたけれども、北さんは東京の洋服屋さん、中畑さんは故郷の呉服屋さん、共に古くから私の生家と親密にして来ている人たちであつて、私が五度も六度も、いや、本当に、数え切れぬほど悪い事をして、生家との交通を断たれてしまつてからでも、このお二人は、謂わば純粹の好意を以て長い間、いぢどもいやな顔をせず、私の世話をしてくれた。昨年の夏にも、北さんと中畑さんが相談して、お二人とも故郷の長兄に怒られるのは覚悟の上で、私の十年振りの帰郷を画策してくれたのである。

「しかし、大丈夫ですか？ 女房や子供などを連れて行って、玄關払いを食らわされたら、目もあてられないからな。」私は、いつでも最悪の事態ばかり予想する。

「そんな事は無い。」とお二人とも真面目に否定した。

「去年の夏は、どうだったのですか？」私の性格の中には、石橋をたたいて渡るケチな用心深さも、たぶん^あに在るようだ。「あのあとで、お二人とも文治さん（長兄の名）に何か言われはしなかったですか？ 北さん、どうですか？」

「それあ、兄さんの立場として、」北さんは思案深げに、「御親戚のかた達の手前もあるし、よく来たとは言えません。けれども、私が連れて行くんだったら、大丈夫だと思うのです。去年の夏の事も、あとで兄さんと東京でお逢いしたら、兄さんは私にただ一こと、北君は人が悪いなあ、とそれだけ言っただけです。怒ってなんかいやしません。」

「そうですか。中畑さんのほうは、どうでしたか？ 何か兄さんに言われやしませんでしたか？」

「いいえ。」中畑さんは顔を上げ、「私には一ことも、なんにも、おっしやいませんでした。いま迄は私が、あなたに何か世話でもすると、あとで必ず、ちよつとした皮肉^{ひにく}をおっしやつたものですが、去年の夏の事に限って、なんにも兄さんは、おっしやいませんでし

た。」

「そうですか。」私は少し安心した。「あなた達にご迷惑がかからない事でしたら、私は連れていつてもらいたいです。母に、逢いたくないわけは無いんだし、また、去年の夏には、文治兄さんに逢うことが出来ませんでした。こんどこそ逢いたい。連れていつて下さると、私は大いにありがたいのですが、女房のほうはどうですか。こんどはじめて亭主の肉親たちに逢うのですから、女は着物だのなんだの、めんどろな事もあるでしょうし、ちよつと大儀がるかも知れません。そこは北さんから一つ、女房に説いてやって下さい。私から言つたんじや、あいつは愚図々々いうにきまつていますから。」私は妻を部屋へ呼んだ。

けれども結果は案外であつた。北さんが、妻へ母の重態を告げて、ひとめ園子さんを、などと言つてゐるうちに妻は、ぺたりと畳に両手をついて、

「よろしく、お願い致します。」と言つた。

北さんは私のほうに向き直つて、

「いつになさいますか？」

二十七日、という事にきまつた。その日は、十月二十日だった。

それから一週間、妻は仕度したくにてんてこ舞いの様子であつた。妻の里から妹が手伝いに来た。どうしても、あたらしく買わなければならぬものも色々あつた。私は、ほとんど破産しかけた。園子だけは、何も知らずに、家中をヨチヨチ歩きまわっていた。

二十七日十九時、上野発急行列車。満員だつた。私たちは原町まで、五時間ほど立つたままだつた。

「ハイヨイヨワルシ」ダザイイツコクモハヤクオイデマツ」ナカバタ

北さんは、そんな電報を私に見せた。一足さきに故郷へ歸っていた中畑さんから、けさ北さんの許もとに來た電報である。

翌朝八時、青森に着き、すぐに奥羽線に乗りかえ、川部という駅でまた五所川原行ごしやがわらの汽車に乗りかえて、もうその辺から列車の両側は林檎畑りんご。ことしは林檎も豊作のようである。「まあ、綺麗きれい。」妻は睡眠不足の少し充血した眼を見張つた。「いちど、林檎のみのっているところを、見たいと思つていました。」

手を伸ばせば取れるほど真近かなところに林檎は赤く光っていた。

十一時頃、五所川原駅に着いた。中畑さんの娘さんが迎えに来ていた。中畑さんのお家は、この五所川原町に在るのだ。私たちは、その中畑さんのお家で一休みさせてもらつて、

妻と園子は着換え、それから金木町の生家を訪れようという計画であつた。金木町というのは、五所川原から更に津軽鉄道に依よつて四十分、北上したところに在るのである。

私たちは中畑さんのお家で昼食をごちそうになりながら、母の容ようだい態をくわしく知らされた。ほとんど危き篤とくの状態らしい。

「よく来て下さいました。」中畑さんは、かえつて私たちにお礼を言つた。「いつ来るか、いつ来るかと気が気じやなかつた。とにかく、これで私も安心しました。お母さんは、黙つていらつしやるけど、とてもあなた達を待っているご様子でしたよ。」

聖書に在る「蕩とうじ児の帰宅」を、私はチラと思い浮べた。

昼食をすませて出発の時、

「トランクは持つて行かないほうがよい、ね、そうでしょう？」と北さんは、ちよつと強い口調で私に言つた。「兄さんから、まだ、ゆるしが出ているわけでもないのに、トランクなどさげて、——」

「わかりました。」

荷物は一切、中畑さんのお家へあずけて行く事にした。病人に逢わせてもらえるかどうか、それさえまだわかつていない、という事を北さんは私に警告したのだ。

園子のおしめ袋だけを持って、私たちは金木行の汽車に乗った。中畑さんも一緒に乗った。

刻一刻、気持が暗鬱になった。みんないい人なのだ。誰も、わるい人はいないのだ。私ひとりが過去に於いて、ぶていさいな事を行い、いまもなお十分に聡明ではなく、悪評高く、その日暮しの貧乏な文士であるという事実のために、すべてがこのように気まづくなるのだ。

「景色のいいところですね。」妻は窓外の津軽平野を眺めながら言った。「案外、明るい土地ですね。」

「そうかね。」稲はすっかり刈り取られて、満目の稲田には冬の色が濃かった。「僕には、そうも見えないが。」

その時の私には故郷を誇りたい気持も起らなかった。ひどく、ただ、くるしい。去年の夏は、こうではなかった。それこそ胸をおどらせて十年振りの故郷の風物を眺めたものだが。

「あれは、岩木山だ。富士山に似ているつていうので、津軽富士。」私は苦笑しながら説明していた。なんの情熱も無い。「こつちの低い山脈は、ぼんじゅ山脈というのだ。あれ

が馬禿山^{まはげやま}だ。」実に、投げやりな、いい加減な説明だった。

ここがわしの生れ在^{ざいしよ}所、四、五丁ゆけば、などと、やや得意そうに説明して聞かせる梅川忠兵衛の新口^{にのくち}村は、たいへん可憐^{かれん}な芝居であるが、私の場合は、そうではなかった。忠兵衛が、やたらにプンプン怒っていた。稲田の向うに赤い屋根がチラと見えた。

「あれが、」僕の家、と言いかけて、こだわって、「兄さんの家だ。」と言った。

けれどもそれはお寺の屋根だった。私の生家の屋根は、その右方に在った。

「いや、ちがった。右の方の、ちよつと大きいやつだ。」滅茶々々である。

金木駅に着いた。小さい姪^{めい}と、若い綺麗な娘さんとが迎えに来ていた。

「あの娘さんは、誰？」と妻は小声で私にたずねた。

「女中だろう？」 挨拶^{あいさつ}なんか要^いらない。」去年の夏にも、私はこの娘さんと同じ年恰好

の上品な女中を兄の長女かと思ひ、平伏するほどいいねいにお辞儀をしてちよつと具合の悪い思ひをした事があるので、こんどは用心してそう言ったのである。

小さい姪というのは兄の次女で、これは去年の夏に逢つて知つていた。八歳である。

「シゲちゃん。」と私が呼ぶと、シゲちゃんは、こだわり無く笑つた。私は少し助かつたような気がした。この子だけは、私の過去を知るまい。

家へはいった。中畑さんと北さんは、すぐに二階の兄の部屋へ行ってしまった。私は妻子と共に仏間へ行つて、仏さまを拝んで、それから内輪うちわの客だけが集る「常居じょい」という部屋へさがつて、その一隅に坐つた。長兄の嫂も、次兄の嫂も、笑顔で以て迎えて呉くれた。祖母も、女中に手をひかれてやつて来た。祖母は八十六歳である。耳が遠くなつてしまつた様子だが、元気だ。妻は園子にも、お辞儀をさせようとして苦心していたが、園子は何でお辞儀をしようとせず、ふらふら部屋を歩きまわつて、皆をあぶながらせた。

兄が出て来た。すつと部屋を素通りして、次の間に行つてしまった。顔色も悪く、ぎよつとするほど瘦せて、けわしい容貌になつていた。次の間にも母の病氣見舞いの客がひとり来ているのだ。兄はそのお客としばらく話をして、やがてその客が帰つて行つてから、

「常居じょい」に来て、私が何も言わぬさきから、

「ああ。」と首肯うなずいて畳に手をつき、軽くお辞儀をした。

「いろいろ御心配をかけました。」私は固くなつてお辞儀をした。「文治兄さんだ。」と妻に知らせた。

兄は、妻のお辞儀がはじまらぬうちに、妻に向つてお辞儀をした。私は、はらはらした。お辞儀がすむと、兄はさつさと二階へ行つた。

はてな？　と思った。何かあつたな、と私は、ひがんだ。この兄は、以前から機嫌の悪い時に限つて、このように妙によそしく、ていねいにお辞儀をするのである。北さんも中畑さんも、あれつきりまだ二階から降りて来ない。北さん何か失敗したかな？　と思つたら急に心細いやら、おそろしいやら、胸がどきんどきんして来た。嫂がニコニコ笑ひながら出て来て、

「さあ。」と私たちを促した。私は、ほつとして立ち上つた。母に逢える。別段、氣まづい事も無く、母との対面がゆるされるのだ。なあんだ。少し心配しすぎた。

廊下を渡りながら嫂が、

「二、三日前から、お待ちになつて、本当に、お待ちになつて。」と私たちに言つて聞かせた。

母は離れの十畳間に寝ていた。大きいベッドの上に、枯れた草のようにやつれて寝ていた。けれども意識は、ハッキリしていた。

「よく来た。」と言つた。妻が初対面の挨拶をしたら、頭をもたげるようにして、うなづいて見せた。私が園子を抱えて、園子の小さい手を母の瘦せた手のひらに押しつけてやつたら、母は指を震わせながら握りしめた。枕頭にいた五所川原の叔母は、微笑^{ほほえ}みながら涙

を拭いていた。

病室には叔母の他に、看護婦がふたり、それから私の一ばん上の姉、次兄の嫂、親戚のおばあさんなど大勢いた。私たちは隣りの六畳の控えの間に行つて、みんなと挨拶を交した。修治（私の本名）は、ちつとも変らぬ。少しふとつてかえつて若くなった、とみんなが言つた。園子も、懸念^{けねん}していたほど人見知りはず、誰にでも笑いかけていた。みんな控えの間の、火鉢のまわりに集つて、ひそひそ小声で話をはじめて、少しずつ緊張もときほぐれて行つた。

「こんどは、ゆつくりして行くんでしょう？」

「さあ、どうだか。去年の夏みたいに、やつぱり二、三時間で、おいとまするような事になるんじゃないかな。北さんのお話では、それがいいという事でした。僕は、なんでも、北さんの言うとおりにしようと思つているのですから。」

「でも、こんなにお母さんが悪いのに、見捨てて帰る事が出来ますか。」

「いずれ、それは、北さんと相談して、——」

「何もそんなに、北さんにこだわる事は無いでしょう。」

「そうもいかない。北さんには、僕は今まで、ずいぶん世話になつてゐるんだから。」

「それは、まあ、そうでしょう。でも、北さんだって、まさか、——」

「いや、だから、北さんに相談してみるといいのです。北さんの指図に従っていると間違いないのです。北さんは、まだ兄さんと二階で話をしているようですが、何か、ややこしい事でも起っているんじゃないでしょうか。私たち親子三人、ゆるしも無く、のこのこ乗り込んで、——」

「そんな心配は要らないでしょう。英治さん（次兄の名）だって、あなたにすぐ来いって速達を出したそうじゃないの。」

「それは、いつですか？ 僕たちは見ませんでしたよ。」

「おや。私たちは、また、その速達を見て、おいでになったものとはかり、——」

「そいつあ、まずかったな。行きちがいになったのですね。そいつあ、まずい。妙に北さんが出しやばったみたいな形になっちゃった。」なんだか、すっかりわかったような気がした。運が悪いと思った。

「まずい事は無いでしょう。一日でも早く、駆けつけたほうがいいんですもの。」

けれども、私は、しよげてしまった。わざわざ私たちを、商売を投げて連れて来て下さった北さんにも気の毒であった。ちゃんと、いい時期に知らせてあげるのに、なあ、とい

う兄たちのくやしさもわかるし、どうにも具合いの悪い事だと思った。

先刻、駅へ迎えに来ていた若い娘さんが、部屋へはいって来て、笑いながら私にお辞儀をした。また失敗だったのだ。こんどは用心しすぎて失敗したのである。全然、女中さんではなかった。一ばん上の姉の子だった。この子の七つ八つの頃までは私も見知っていたが、その頃は色の黒い小粒の子だった。いま見ると、背もすらりとして気品もあるし、まるで違う人のもようであつた。

「光ちやんですよ。」^{みつ}叔母も笑いながら、「なかなか、べっぴんになったでしょう。」

「べっぴんになりました。」私は真面目に答えた。「色が白くなった。」

みんな笑った。私の気持も、少しほぐれて来た。その時、ふと、隣室の母を見ると、母は口を力無くあけて肩で二つ三つ荒い息をして、そうして、瘦せた片手を^{はえ}蠅でも追い払うように、ひよいと空に泳がせた。変だな？ と思った。私は立って、母のベッドの傍へ行つた。他のひとたちも心配そうな顔をして、そつと母の枕頭^{かけふとん}に集つて来た。

「時々くるしくなるようです。」看護婦は小声でそう説明して、掛蒲団の下に手をいれて母のからだを懸命にさすつた。私は枕もとにしゃがんで、どこが苦しいの？ と尋ねた。母は、^{かす}幽かにかぶりを振つた。

「がんばって。園子の大きくなるところを見てくれなくちや駄目ですよ。」私はてれくさいのを忪こらえてそう言った。

突然、親戚のおばあさんが私の手をとって母の手と握り合わせた。私は片手ばかりでなく、両方の手で母の冷い手を包んであたためてやった。親戚のおばあさんは、母の掛蒲団に顔を押しつけて泣いた。叔母も、タカさん（次兄の嫂の名）も泣き出した。私は口を曲げて、こらえた。しばらく、そうしていたが、どうにも我慢出来ず、そつと母の傍から離れて廊下に出た。廊下を歩いて洋室へ行つた。洋室は寒く、がらんとしていた。白い壁に、罌粟けしの花の油絵と、裸婦の油絵が掛けられている。マントルピースには、下手へたな木彫が一つぽつんと置かれている。ソファには、豹ひょうの毛皮が敷かれてある。椅子もテエブルも絨氈じゅうたんも、みんな昔のままであった。私は洋室をぐるぐると歩きまわり、いま涙を流したらウソだ、いま泣いたらウソだぞ、と自分に言い聞かせて泣くまい泣くまいと努力した。こつそり洋室にのがれて来て、ひとりで泣いて、あっぱれ母親思いの心やさしい息子さん。キザだ。思わせぶりたつぷりじゃないか。そんな安っぽい映画があつたぞ。三十四歳にもなつて、なんだい、心やさしい修治さんか。甘つたれた芝居はやめろ。いまさら孝行息子でもあるまい。わがまま勝手の検束をやらかしてさ。よせやいだ。泣いたらウソだ。涙は

ウソだ、と心の中で言いながら、ふところで手して部屋をぐるぐる歩きまわっているのだが、いまにも、おえっ嗚咽が出そうになるのだ。私は実に閉口した。煙草を吸ったり、鼻をかんんだり、さまざま工夫して頑張つて、とうとう私は一滴の涙も眼の外にこぼれ落さなかった。

日が暮れた。私は母の病室には帰らず、洋室のソファに黙って寝ていた。この離れの洋室は、いまは使用していない様子で、スイッチをひねっても電気がつかない。私は寒い暗闇の中にひとりでいた。北さんも中畑さんも、離れのほうへ来なかった。何をしているのだろう。妻と園子は、母の病室にいるようだ。今夜これから私たちは、どうなるのだろう。はじめの予定では、北さんの意見のとおり、お見舞いしてすぐに金木を引き上げ、その夜は五所川原の叔母の家へ一泊という事になっていたのだが、こんなに母の容態が悪くは、予定どおりすぐ引き上げるのも、かえって気まずい事になるのではあるまいか。とにかく北さんに逢いたい。北さんは一体どこにいるのだろう。兄さんとの話が、いよいよややこしく、もつれているのではあるまいか。私は居るべき場所も無いような気持だった。妻が暗い洋室にはいつて来た。

「あなた！　かぜを引きますよ。」

「園子は？」

「眠りました。」病室の控えの間に寝かせて置いたという。

「大丈夫かね？ 寒くないようにして置いたかね？」

「ええ。叔母さんが毛布を持って来て、貸して下さいました。」

「どうだい、みんないいひとだろう。」

「ええ。」けれども、やはり不安の様子であつた。「これから私たち、どうなるの？」

「わからん。」

「今夜は、どこへ泊るの？」

「そんな事、僕に聞いたつて仕様が無いよ。いつさい、北さんの指図にしたがわなくちゃいけないんだ。十年来、そんな習慣になつてゐるんだ。北さんを見捨てて直接、兄さんに話掛けたりすると、騒動になつてしまふんだ。そういう事になつてゐるんだよ。わからんかね。僕には今、なんの権利も無いんだ。トランク一つ、持つて来る事さえできないんだからね。」

「なんだか、ちよつと北さんを恨^{うら}んでるみたいね。」

「ばか。北さんの好意は、身にしてみても、わかつてゐるさ。けれども、北さんが間にはいつているので、僕と兄さんとの仲も、妙にややこしくなつてゐるようなところもあるんだ。」

どこまでも北さんのお顔を立てなければならぬし、わるい人はひとりもないんだし、

――

「本当にねえ。」妻にも少しわかつて来たようであつた。「北さんが、せつかく連れて来て下さるというのに、おことわりするのも悪いと思つて、私や園子までお供^{とも}して来て、それで北さんにご迷惑がかつたのでは、私だつて困るわ。」

「それもそうだ。うつかりひとの世話なんか、するもんじやないね。僕という難物の存在がいけないんだ。全くこんどは北さんもお氣の毒だつたよ。わざわざこんな遠方へやつて来て、僕たちからも、また、兄さんたちからも、そんなに有^{ありがた}難がられないと来ちや、さんざんだ。僕たちだけでも、ここはなんとかして、北さんのお顔の立つように一工夫しなければならぬところなんだろうけれど、あいにく、そんな力はねえや。下手^{へた}に出しやばつたら、滅茶々々だ。まあ、しばらくこうして、まごまごしているんだね。お前は病室へ行つて、母の足でもさすつていなさい。おふくろの病氣、ただ、それだけを考えていればいいんだ。」

妻は、でも、すぐには立ち去ろうとしなかった。暗闇の中に、うなだれて立っている。こんな暗いところに二人いるのを、ひとに見られたら、はなはだ具合いがわるいと思つた

ので私はソファから身を起して、廊下へ出た。寒気がきびしい。ここは本州の北端だ。廊下のガラス戸越しに、空を眺めても、星一つ無かった。ただ、もののしく暗い。私は無^む性に仕事をしたくな^{しやう}った。なんのわけだかわからない。よし、やろう。一途^{いちず}に、そんな気持だ^しった。

嫂が私たちをさがしに来た。

「まあ、こんなところに！」明るい驚きの声を挙^あげて、「ごはんですよ。美知子さんも、一緒にどうぞ。」嫂はもう、私たちに対して何の警戒心も抱^{いだ}いていない様子だった。私にはそれが、ひどくたのもしく思われた。なんでもこの人に相談したら、間違いが無いのではあるまいかと思^{おも}った。

母屋^{おもや}の仏間に案内された。床の間を背にして、五所川原の先生（叔母の養子）それから北さん、中畑さん、それに向い合^あって、長兄、次兄、私、美知子と七人だけの座席が設けられていた。

「速達が行きちがいになりました。」私は次兄の顔を見るなり、思わずそれを言^うってしまった。次兄は、ちよつと首肯^{うなず}いた。

北さんは元気が無かった。浮かぬ顔をしていた。酒席にあ^いっては、いつも賑^{にぎ}やかな人で

あるだけに、その夜の浮かぬ顔つきは目立った。やっぱり何かあったのだな、と私は確信した。

それでも、五所川原の先生が、少し酔ってはしゃいでくれたので、座敷は割に陽気だった。私は腕をのぼして、長兄にも次兄にもお酌しやくをした。私が兄たちに許ゆるされているのか、いないのか、もうそんな事は考えまいと思った。私は一生ゆるされる筈はずはないのだし、また、許してもらおうなんて、虫のいい甘ったれた考えかたは捨てる事だ。結局は私が、兄たちを愛しているか愛していないか、問題はそこだ。愛する者は、さいわいなる哉かな。私が兄たちを愛して居ればいいのだ。みれんがましい慾の深い考えかたは捨てる事だ、などと私は独酌で大いに飲みながら、たわいない自問自答をつづけていた。

北さんはその夜、五所川原の叔母の家に泊った。金木の家は病人でごたついているので、北さんは遠慮したのか、とにかく五所川原へ泊る事になったのだ。私は停車場まで北さんを送って行った。

「ありがとうございます。おかげさまでした。」私は心から、それを言った。いま北さんと別れてしまうのは心細かった。これから誰も私に指図をしてくれる人は無い。「僕たちは今晚、このまま金木へ泊ってもかまわないのですか？」何かと聞いて置きたかった。

「それあ構わないでしょう。」私の気のせいかな、少しよそよそしい口調だった。「なにせ、お母さんがあんなにお悪いのですから。」

「じゃ私たちは、もう二、三日、金木の家へ泊めてもらって、——それは図々（ずうずう）しいでしょうか。」

「お母さんの容態に依（よ）りますな。とにかく、あした電話で打ち合しましょう。」

「北さんは？」

「あした東京へ帰ります。」

「たいへんですね。去年の夏も、北さんは、すぐにお帰りになったし、ことしこそ、青森の近くの温泉にでも御案内しようと、私たちは準備して来たのですけど。」

「いや、お母さんがあんなに悪いのに、温泉どころじゃありません。じつさい、こんなに容態が悪くなっているとは思わなかった。案外でした。あなたに払っていたいた汽車賃は、あとで計算しておかえし致しますから。」突然、汽車賃の事など言い出したので、私はまごついた。

「冗談じゃない。お帰りの切符も私が買わなければならないところです。そんな御心配は、よして下さい。」

「いや、はつきり計算してみましょう。中畑さんのところにあずけて置いたあなた達の荷物も、あした早速、中畑さんにたのんで金木のお家へとどけさせる事にしましょう。もう、それで私の用事は無い。」まっくらい路を、どんどん歩いて行く。「停車場はこつちでしたね？　もう、お見送りは結構ですよ。本当に、もう。」

「北さん！」私は追いつるように、二、三歩足を早めて、「何か兄さんに言われましたか？」

「いいえ。」北さんは、歩をゆるめて、しんみりした口調で言った。「そんな心配は、もう、なさらないほうがいい。私は今夜は、いい気持でした。文治さんと英治さんとあなたと、立派な子供が三人ならんで坐っているところを見たら、涙が出るほど、うれしかった。もう私は、何も要らない。満足です。私は、はじめから一文の報酬だって望んでいなかった。それは、あなただつてご存じでしょう？　私は、ただ、あなた達兄弟三人を並べて坐らせて見たかったのです。いい気持です。修治さんも、まあ、これからしっかりとやりなさい。私たち老人は、そろそろひっこんでいい頃です。」

北さんを見送って、私は家へ引返した。もうこれからは北さんにたよらず、私が直接、兄たちと話合わなければならぬのだ、と思つたら、うれしさよりも恐怖を感じた。きっと

また、へまな不作法などを演じて、兄たちを怒らせるのではあるまいかという卑屈ひくつな不安で一ぱいだった。

家の中は、見舞い客で混雑していた。私は見舞客たちに見られないように、台所のほうから、こっそりはいって、離れの病室へ行きかけて、ふと「常居じょうい」の隣りの「小間こま」をのぞいて、そこに次兄がひとり坐っているのを見つけ、こわいものに引きずられるように、するすると傍へ行つて坐った。内心、少からずビクビクしながら、

「お母さんは、どうしても、だめですか？」と言った。いかにも唐突な質問で、自分ながら、まずいと思った。英治さんは、苦笑を浮べ、ちよつとあたりを見廻してから、

「まあ、こんどは、むずかしいと思わねばいけない。」と言った。そこへ突然、長兄がはいって来た。少しまごついて、あちこち歩きまわつて、押入れをあけたりしめたりして、それから、どかと次兄の傍にあぐらをかいた。

「困った、こんどは、困った。」そう言つて顔を伏せ、眼鏡を額ひたいに押し上げ、片手で両眼をおさえた。

ふと気がつくつと、いつの間にか私の背後に、一ばん上の姉が、ひっそり坐っていた。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集」ちくま文庫、筑摩書房

1989（昭和64）年1月31日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月から1976（昭和51）年6月

入力：柴田卓治

校正：ふるかわゆか

2003年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

故郷

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>